

## I 巻頭言

### 「韓国企業調査」を終えて

所長 麻島 昭一

社会科学研究所は本年3月、経営研究所と共催で「韓国企業調査団」（団長麻島、副団長桜井通晴＝経営研究所長）を組織、韓国企業の実態を視察した。短い旅ではあったが、総勢30余名が参加したこの企画は、自画自賛ではないが有意義であり、成功だったと確信している。これまでの社研の歴史に照らしても、この企画はまさに革新的というべく、その経緯と感想を記録に止めて置くべきだと考える。これが「月報」の場を借りて特集を組んだ所以である。幸いにも本号には参加所員の「報告」ないし「感想」が幾編も寄せられているので、本調査団の見聞の具体的な内容はそれに譲り、筆者は企画実現の経緯、行動日程、若干の私見などを記録しておきたい。

#### 1. 企画実現の経緯

この企画が発起されたのは、昨年4月の事務局会議の折、池本正純所員から非公式に打診されたことに始まる。すなわち、同所員は研究会担当の職責上、いろいろ運営に苦心されていたが、経営研究所の溝田誠吾事務局長との会話の中で、韓国の工場を見たいものだという共通の願望が生まれ、研究会の行事としての可能性を考えたことにある。しかし本学で先生方が大挙して海外に企業視察に行った前例はないし、その組織化は大変であるし、受け入れの可能性も不明で、そう簡単に出来るとも思えなかったが、私は池本所員の斬新な発想を尊重し、社研として新機軸も必要と思い賛成した。実現の可能性を探るべく、大学当局への打診は私が引き受け、池本所員には具体策の考慮をお願いした。

ところで池本所員も私も、先生方が多数参加され、万一事故でもあったらどうするか、未知数の要素が多く前例がないだけに、この企画にどこかから保守的なチェックがかかってはという心配があった。望月学長に持ちかけたところ、即座に「No Problem」と返答され、杞憂であることを知ったし、結局、誰からもこの企画への疑義はでなかった。池本所員にその旨を伝え、実行計画を組むことをお願いし、経営研究所との共催の線で行くこと、しかし参加人数からみて社研が多くの負担（といっても結局は池本所員の努力次第ということになるが）を覚悟することが合意された。溝田事務局長は社研所員でもあり、池本所員と経営学部と同僚という親しさ、お二人のよいコンビネーションが実現の基礎にあったことを強調して

おきたい。

池本所員の情報では、工場見学にたいする韓国企業の姿勢は固く、見学可能性は予断を許さないということであったし、韓国事情についての予備知識も必要であるとのことであった。秋になり池本所員の努力が実って実行案が固まる時、本学と提携している檀国大学校を訪問することはどうかと考え、国際交流事務部から交流（たとえば「最近の韓国経済と産業の動向」のごときレクチャーをしていただく）の可能性を同校に打診して貰ったところ快諾され、檀国大学校訪問と3企業の工場見学という骨子が固まった。望月学長からもぜひ同校と交流して来てほしい旨の希望があり、同校との接触には国際交流事業部にたいへん尽力していただいた。

通常ではなかなか工場見学に応じないといわれていたにも拘らず、ある筋から好運にも韓国の全国経済人联合会へのルートが通じ、同会を通じて韓国大企業から工場見学の応諾が得られたのは、ひとえに池本所員の功績である。当初の予想では、旅費の自己負担分を考えるとせいぜい20人止まりと踏んでいたが、参加者を募ってみると30人を越えたので、所員の関心の深さに驚かされた。やはりかかる企画への潜在的重要な大きかったのである。

そして韓国経済・企業に対する知識的準備をすべきだという動きが生まれ、社研の通常研究会を2回それに充て、次の方を講師にお招きしたところ、通常以上の研究会参加者があって、これまた関心の深さに再度驚くことになった。われわれの事前勉強に大いに役立ったことはいうまでもない。

本年2月13日（土）16：30～18：30

「韓国アルプス電気の現状」本田哲哉氏（アルプス電気海外支援部アセアン課）

同2月23日（火）15：00～18：00

「韓国における日本型生産システム」板垣 博氏（埼玉大学教養部教授）

他方、30人を越える参加者の都合を考え、溝田事務局長を煩わし阪急交通社に旅程を組んで貰い、現地集合、現地解散の線で臨み、結果的に海外渡航の危険分散が幾分か果たされたのである。

かくしていくつもの小集団がソウルに集合してスケジュールが開始されることになった。

## 2. 行動記録

さて、今回の韓国企業調査団の行動は二つに分かれる。一つは檀国大学校を訪問し、学術交流を計ったことである。二つは3箇所の大企業工場を見学したことである。その公式スケジュールは次のごとくであった。

1) 檀国大学校訪問 1993年3月15日午後(ソウル市内)

13時～ 有志構内見学

15時～17時半 張忠植総長挨拶と講演・質疑

論題 (1) 韓国経済の発展と現況 黄明水教授(大学院院長)

(2) 韓日貿易問題の現況と問題点 黄南逸教授(2部大学長)

(3) 韓国労働問題の現況と動向 李奎昌教授(経営大学院長)

(4) 韓国の大学商経教育の現況 裴基完教授(商経大学長)

18時～ 韓国式夕食会・金裕赫副総長挨拶ほか

2) 工場見学

(1) 3月16日午前 三星電子水原工場(水原市八達区梅灘3洞416番地)

(2) 3月17日午前 浦項総合製鉄株式会社浦項製鉄所(浦項市槐東洞1番地)

(3) 3月18日午前 現代自動車株式会社(蔚山市中区楊亭洞700番地)

以上の公式日程のほか慶州の商店街(日本のアメヨコの), 庶民的マーケット, 釜山の魚市場などを見たのも興味深かった。

### 3. 檀国大学校での交流

工場見学については、多くの参加者がふれているので、ここでは檀国大学校での交流の様について簡単に記しておこう。先着組だけ予定時刻の少し前に同校を表敬訪問し構内を案内してもらったが、大学の雰囲気はなんとなく雑然とはしているものの活気にあふれていた。ビラがベタベタと張られ、立看板や横断幕があり、ギター片手に歌うグループがおりという具合である。レクチャーを受けていたときには、集会でもやっていたのかマイクの音が聞こえてきた。もっともそれらの多くが「政治」と関わっているというわけでもないようである。また高齢の石宙善先生(民俗博物館長・大学院教授)が、われわれのために熱心に民族衣装の展示物を説明して下さったのには恐縮した。彼女は若い頃東京で学んだことがあるという。

その後檀国大学校の4名の教授から、先に記したテーマに関して日本語でレクチャーを受けることができた。われわれからすればとても助かることではあるが、外国に来て日本語の話を聞いているのが「不思議」でいささか面映い感じがする。張総長は、冒頭の挨拶のなかで「両国の間に不幸な歴史があったが」と述べられたが、そこには「加害」と「被害」に彩られた歴史に対する複雑な思いがあったのだろう。国家をこえたアジアの人々との相互交流をすすめることが、「戦争責任」と「戦後責任」を自覚する者にとっては「義務」であろう。

レクチャーのひとつひとつは長いものではなかったが、詳しく紹介することはやめるが、

朝鮮戦争による人命の損失（戦死者数は南150万、北200万）と国土の徹底した破壊、53年の休戦協定、60年4月の学生革命による李承晩政権の打倒、朴政権による一連の経済開発計画、65年の韓日条約、ベトナム特需、70年のセマウル運動（新しい村づくり運動）、75年からの低賃金を利用した中東進出、10大財閥（現代、三星、金星など）の育成、79年の朴大統領暗殺、「3低（為替、石油、金利）景気」、87年6月29日の「民主化宣言」、88年のソウル・オリンピック景気と続く黄明水教授の話を知っていると、日本経済史を振り返っているかのような思いにとらわれた。

韓国は教育熱が高いことで知られるが、60～70年代には低賃金の高学歴労働者が成長の原動力となったという。しかし李教授や黄南逸教授の話によれば、「民主化宣言」後の新たな事態として、労働紛争が無秩序に爆発し、賃金が大幅に上昇して「3高（賃金、物価、為替）時代」を迎えたために、国際競争力の減退や外国企業の韓国からの撤退、中小企業の倒産、対日貿易赤字などが大きな問題となり、労働者の勤労意欲の低下や3K労働忌避現象も表面化してきているとのことである。今日では労働紛争は下火となったものの依然として「消費ブーム」は続いており、インフレの懸念は現実のものとなりつつある。各報告者もそれぞれの立場から、「4頭の龍」（韓国、台湾、香港、シンガポール）のうち韓国のみが成長率を低下させていることに懸念を表明していた。

#### 4. 若干の私見

第一に、帰ってきてから韓国についての関心が一層高まり、遅蒔きながら多少本を読んだ。つくづく先に読んで行けばよかったと後悔した。韓国人の思考様式、行動様式の違いを知って、自分の無知を恥じた。李朝時代から続く中央集中の伝統、父系中心の血縁関係・地縁・学閥重視の社会構造、両班文化への強い憧れ、黒白を明確にし、強い自己主張、戦後の徹底的な意図的教育、などなど、日韓の文化構造の違いが分かっていたら、もっと有効な出会いが可能であったかも知れない。同行の諸先生方は十分勉強されていたのであろうが、私の場合頭では事前準備の必要が分かっている、直前まで他の仕事に追われて果たせなかったことの後悔である（それでも多少、韓国経済史の本や黄明水教授の経営史の論文に眼を通したりしたので）。

今回はわれわれに対して「日帝36年」攻撃を真正面からは向けられなかった。大学・見学先が気を使って呉れたことが分かる。それだけに日本人としての不愉快さは免れたものの、表面的な接触であったのかも知れない。ゆっくり意見交換するにはあまりに時間が乏しかった。もともと今回は「初見聞」であり、手がかりを得ることに意義があった、と割り切った

い。

ちなみに、望月学長から韓国は礼儀を重んじると聞かされていたので、こちらもそれに合わせるために、せめて挨拶の一部を片言の韓国語でと思い、機上で、車中でにわか勉強をした。単語カードを作り丸暗記したのは何年ぶりであろうか。まさにお愛敬であるが、こちらの気持ちが相手にどれだけ汲んでもらえたことか。

第二に、日本との類似現象への驚きである。すなわち、表面的に日本との類似現象（たとえば高層ビルの林立、高層住宅の大量建設、高速道路網の整備、ソウルへの一極集中、大規模生産体制の確立、日本の3Kにあたる若者の3D嫌いなど）が強く印象づけられたが、そこから噴出する矛盾を解決する道は両国で同じでよいとは思えない。社会構造や経済構造が違いながら類似現象が発生したとすれば、解決も異なる可能性が強いのではないか。それでもお互いにそれぞれの因果関係を確かめ合いつつ、相手から解決のヒントを得ることが出来るかも知れない。帰ってきて多少本を読んでもみると、表面的な類似の裏に、強度の異質性があるように思えてならなかった。その意味から両国の社会科学の各分野での比較研究は面白いであろう。

第三に、社研が知的好奇心の集団だとすれば、このような企画は社研らしいというべきであろう。個人的には困難であったり、面倒くさいひともし少なくなく、連れて行ってもらえれば喜んで参加するという需要が多かったことを示している。毎年となると立案・実行する主催者側は大変だが、1年おきぐらいに企画を立てるのは喜ばれるであろう。また、社研所員は5学部にはまたがるが、今回の参加も5学部にあたり多彩である。とすれば訪問旅程の中で、訪問先の印象を述べ合う機会があるとよかったと思われる。後では忘れるし、異なった分野の人がいかなる感想をもったのか、お互いに知ることは参考になるし、まさに社研ならではの行き方ではあるまいか。

最後に、訪問先ではもちろんのこと、韓国の全経聯、本学の国際交流事務部、阪急交通社新宿支店、など多くの方々のお世話になった。また、ソウルから釜山までチャーターバスで旅行したわけであるが、幸い一人の故障もなく、終始和気あいあい何のトラブルもなく終えることが出来た。参加者のご協力のお蔭である。重ねて特筆すべきは、企画・交渉だけでなくツアーコンダクターまで遂行された主役池本教授のご努力である。紙面を借りてお世話になった皆様に感謝申し上げる。